

はじめに

万葉集は、二六五首の長歌・四二〇〇余首の短歌・六二首の旋頭歌、あわせて全四五〇〇余首を二〇巻に構成した撰歌集である。そして、大半の歌が雑歌・相聞・挽歌・譬喩歌の四種に大別されている。

これらすべての万葉歌のなかから、私は愛好してきた長歌五首・短歌九三首・旋頭歌二首、計百首を本書に採択した。

万葉期の日本は、国としていまだ揺籃の段階にあつた。内乱が頻発して社会は混沌としていた。時代の空気がつねに険しく流動していたから、趣味や技芸で安閑と詠まれているなど万葉歌には見当らない。歌を詠むとは生活そのものを自覚する行為にほかならなかつたのであり、あらゆる作に純朴で逞しい気概があふれている。万葉歌の鑑賞はそれゆえか、現代社会の疲弊した空気をしか呼吸していない私たちに、思いがけない覚醒と慰みを、

ときには懐旧の悦びよつこをまでもたらしてくれる。

どのような環境にあつてそれぞれの歌は詠まれたか。私は採択した百首いずれもの鑑賞で、作者が背負う来歴の解明を心がけた。詠じられている場所が明らかで、私自身がその地を踏んでいる歌も多い。そのような作では、かつて私が現地で体感した風光をよみがえらせようと心がけた。読者の皆さんはこの二点をとりわけ本書で味わってくださいるのではないだろうか。

加うるに、実地の旅はできず心の旅であっても、飛鳥あすかと奈良を中心に皆さんが万葉大和やまと圏けんをたずねられるとき、その散策に本書を役立ててくだされば、私にとってこのうえない果報である。

採択した百首には洋数字を添付した。数字は岩波版・新日本古典文学大系『萬葉集』にみる収採番号に準じている。